

ウランバートル、フフホトにおける学会参加記(2017年)

広 川 佐 保

2017年夏、筆者は、いくつかモンゴル関係の会議に出席する機会を得た。まず、8月26日には堤一昭氏（大阪大学）のお誘いを受けて、大阪大学主催、第11回国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境：史料・認識・対話」に参加した。これまで大阪大学中国文化フォーラムは、堤氏を中心となって、石濱文庫所蔵モンゴル語新聞『フフ・トグ』紙の保存に向けて、シンポジウムを開催し、研究報告書を刊行してきた¹。『フフ・トグ』紙は、満洲国時代に刊行されたモンゴル語週刊新聞であり、1930年代のモンゴル語月刊雑誌が継承され、拡大したものである。『フフ・トグ』紙は、大阪大学附属図書館（旧大阪外国語大学附属図書館）の石濱文庫に保管されているが、世界で唯一のまとまったコレクションである。筆者は今回、「文化資産と共同研究：戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ』を展望する」というパネルにおいて、「満洲国研究から見た『フフ・トグ』の可能性」という題目で報告を行った。モンゴル語、ならびにモンゴル地域の雑誌・新聞に関しては、中国において1980年代から、内モンゴル自治区図書館のトゥイメル氏によって研究が進められてきた。氏の最近の著作には、日本の図書館や資料館の所蔵状況も記録されている。

翌8月27日に関西国際空港から仁川を経由してウランバートルへ向かう。そして28日、気温10度を下回る冷え込みの中、ガンバガナ氏（国際教養大学）が、モンゴル国際アカデミーと共同で開催した「20世紀におけるモンゴルの歴史と文化」に参加した。会議には日本からガンバガナ氏、二木博史氏（東京外国語大学名誉教授）、フフバートル氏（昭和女子大学）が参加したほか、モンゴル国の歴史学者や内モンゴル大学の教員が参加し、そこでモンゴル語で報告を行った。ガンバガナ氏の意図は、内・外モンゴルの歴史をモンゴル国の人々と共有することにあったと思う。会議では、20名以上の研究者がモンゴル語で報告し、活発な議論が交わされたが、モンゴル国の研究者の関心は、モンゴルの民族運動にあるように感じられた。なお、会議の報告を含めた論文集として、ガンバガナ編『20世紀前半期とモンゴル人たち（*XX зууны эхэн хагас үе ба монголчууд*）』第1号（ウランバートル、2017年）が刊行されている。また、この会議に前後してウランバートルでは、内モンゴル出身の研究者が中

1 これらの研究報告書、および冊子体の『フフ・トグ』紙（1941年分）はすべてweb上で公開されており、国内外において誰でもアクセスすることが可能である。OUFC(Osaka University Forum on China)ブックレットについては下記、URLを参照のこと。

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/c-forum/booklet.htm#vol10-2>（2018年2月1日閲覧）。

心となり、いくつかの国際会議が開催されている。近年、モンゴル国では多くの学術会議が開催されるようになったが、日本の研究会や学会とはずいぶん雰囲気が異なっている。たとえば歴史関係の会議でも、研究者以外の人たちが自由に参加し、時には気軽に発言することがある。今回もインターネット通信社の記者が来て取材していた。

また会議の合間に、モンゴル国立中央文書館にて開催中の地図の展覧会を見学することが出来た。文書館の所蔵史料は、中央と各旗の歴史文書が主であるが、そのなかには地図のコレクションも含まれている。今回の展示では、文書館が所蔵する清代から近現代までの地図数十点を展示しており、最も古い地図は18世紀半ばのものであった。展示されている地図のうち、国境あたりのハロール（哨台）の地名を細かく記した自治時代の地図や、内モンゴルの地名を詳細に記入した1930年代の地図などがとりわけ目を引いた。また、文書館の館員のかたが丁寧に説明してくれたため、非常に有意義であった。なお、モンゴルの地図に関しては、二木博史氏と上村明氏（東京外国語大学）による資料集が刊行されているが、近年モンゴルで注目が集まっている研究分野といえるだろう²。

8月末から9月の季節は、モンゴル国は入学の季節にあたり、夏の間、閑散としていた大学に学生があふれかえていた。会議の後、モンゴル国立大学で教鞭を執るオウンジャルガル氏の研究室を訪問し、モンゴルにおける研究状況など教えていただいた。また、そこで彼女の編集による、モンゴル国立大学編『歴史の指導の刷新：過程、結果、差し迫る課題（Түүхийн сургалтын шинэчлэл явц, үр дүн, түлгэмдсан асуудал）』（ウランバートル、2017年）という会議の論文集を頂いた。モンゴル国立大学には中国の援助により図書館が新設されていた。こうして短期間のウランバートル訪問を終え、8月31日に帰国する。

引き続き9月8日に「抗日戦争時期的内蒙古国際学術討論会」（於：内蒙古師範大学）に参加するため、中国に向かった。この会議は、内蒙古師範大学学術期刊社、および内蒙古師範大学歴史文化学院、『抗日戦争研究』編集部が主催するもので、今回は祁建民氏（長崎シーボルト大学）の紹介により参加することができた。なお、同会議に関しては、すでに関智英氏（日本学術振興会）が、盧溝橋事件80周年に関連する会議の一環として紹介文を記されている³。そこでも言及されているとおり、この会議は、内モンゴル自治区において日中戦争を主題とする、おそらく初めての会議である。

かつて内モンゴル自治区の首都フフホトでは、5～6年ごとに内モンゴル大学の主催により「蒙古学国際学術討論会」が開催されてきた。この会議では、中国、モンゴル国、ロシア

2 モンゴルの地図に関しては、下記文献を参照されたい。Futaki Hiroshi, Kamimura Akira (ads.), *Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps*, Tokyo University of Foreign Studies, 2005、上村明「地図の描き方と統治の手法－モンゴルの古地図をめぐる」吉田ゆり子、八尾師誠、千葉敏之編『画像史料論：世界史の読み方』（東京外国語大学出版会、2014年）。

3 関智英「東京・上海・フフホト：盧溝橋事件80周年関連の会議に参加して」『中国研究月報』第71巻第11号（2017年11月）。

に居住するモンゴル系の人々のほか、世界のさまざまな国から参加者が集まった。会議ではモンゴル系民族の歴史、文学、言語、その他社会科学など、あらゆる分野が主題となり、数百名の研究者がそこで報告を行った。筆者は最初に参加した会議で、トルコ人、および台湾人研究者と知り合いになり、その後北京で再会し、そのまま瑠璃廠などで古本屋巡りをした記憶がある。もちろん共通言語はモンゴル語であった。しかし2004年以降、このような大規模な会議はフフホトで開催することができなくなり、開催場所は、北京、上海など沿海部の大都市圏に限られている。そのような背景から、フフホトにおける国際会議にはぜひ参加したいと考えていた。8月までに報告要旨を提出し、その後、会議直前に要旨集ファイルが主催者よりメールで送られてきた。

さて9月8日朝、羽田空港を出発し、北京を経由してフフホトに向かった。途中で小林元裕氏（東海大学）と合流し、午後7時頃フフホト白塔国際空港に到着したが、小林氏の元学生で、内蒙古師範大学の日本人留学生の方が、大学の車で出迎えにきてくれた。筆者はこのときになって初めて、会議はフフホト市内ではなく、フフホト郊外ホリリングルの盛楽キャンパスで行われることを知った。車で一時間ほどかけてホリリングルに到着するが、ホリリングルは数年前に遺跡見学のため訪問した場所である。ホテルに到着後、会議の登録を行い、分厚い要旨集を受け取った。そこで内モンゴル師範大学の張晋海氏と、中国社会科学院近代史研究所研究員であり、『抗日戦争研究』主編の高士華氏が出迎えてくれた。郊外ではあるものの、大規模なキャンパスのなかには、多くの学生の活気に満ちていたのが印象的であった。奇しくも今年は内モンゴル自治区成立70周年であるが、筆者が初めてフフホトを訪問したのは50周年の1997年であった。

今回の会議には、日本人では小林元裕氏のほか、関智英氏、田中剛氏（帝京大学）と筆者が参加した。要旨集のタイトルは30編余りで、約半分がモンゴル史に関するもの、残りの半分が抗日戦争に関する報告であった。報告者の約2割がモンゴル人であり、大多数は漢人研究者である。それゆえ会議は漢語が主流となった。分野の違いはあるにしても、これは過去の「蒙古学国際学術討論会」とは大きく異なっている。

まず会議では、内モンゴル師範大学の挨拶を経て、祁建民氏、岳謙厚氏（山西大学）、小林元裕氏による基調講演が行われた。その後、報告者は4つの部会に分けられたため、別の部会の報告を聞くことはできず、その点が残念であった。筆者は蒙疆政権時期の盟旗制度について、オラウンチャブ盟を事例に報告をおこなった。なお、報告要旨、報告ともに発表言語は自由であったが、筆者はモンゴル語で書いた場合、漢人研究者は読まないと判断して英語で記すこととした。報告に際しては、ナヒヤ氏（内蒙古大学）、オヨンゲレル氏（同）にお助けいただいた。ここに記して感謝したい。会議は一日で終了してしまい、また会期中に研究者同士で交流する場は設定されず、その点も心残りであった。

会議の個別テーマから見た限り、地域史のなかに日本支配を位置づける研究と、植民地支配そのものを主題とするテーマに分かれていたように思う。それぞれ詳細な事例研究が多

く、研究の深化を感じられた。なお、中国における日本支配時期の内モンゴル史研究については、故金海（アルタンダライ）氏が精力的に取り組んでこられ、それらの成果は『日本在内蒙古植民統治政策研究』（社会科学文献出版社、北京、2009年）として出版されている。これまで中国において興安省や蒙疆政権に関する档案史料（文書史料）は、断片的にしか刊行されておらず、公開も限定的であった。それを補う史料として、口述記録をもとにした文史資料が刊行されており、またこれと日本の各種機関の報告書、当時の新聞・雑誌資料が研究に用いられてきた。そのような状況にあるため、今回の学会のテーマに関する研究活動も史料の状況に左右されてきた。これまで刊行された主要な研究（書籍）について言及しておく、蒙疆政権にかんして、日本では、森久夫氏によって『徳王自伝』（岩波書店、1994年）が翻訳され、『徳王の研究』（創土社、2000年）等がまとめられたほか、内田知行、柴田善雅編著『日本の蒙疆占領：1937-1945』（研文出版、2007年）があり、最近ではガンバガナ『日本の対内モンゴル政策の研究：内モンゴル自治運動と日本外交1933-1945年』（青山社、2016年）を挙げることができる。また、モンゴル国でも、国内の文書館の史料を利用したD.ゾリクト著『徳王：その研究成果（Д. Зоригт, Дэ Ван : судалгааны бүтээл）』（ウランバートル、2009年）が出版され、1950年前後の徳王の行動が明らかにされている。また中国では、祁建民氏が『二十世紀三四十年代の晋察綏地区』（天津人民出版社、2002年）のなかで蒙疆政権について論じている。現在でさえ、中国における徳王（テムチュグドンロブ王）評価は、モンゴル人から見た徳王像と大きな隔たりがあるため、徳王の歴史的役割を論じることは容易ではない。これは、満洲国時代、内モンゴルに設置された興安省も同様であろう。今回、会議参加者である、内モンゴル師範大学の斎百順氏より『日本侵佔時期「興安省」経済統制政策研究』（遼寧民族出版社、2016年）を頂いたが、これは中国における数少ない興安省の研究であり、重要な意味を持つ。

会議終了後、翌10日にエクスカーションが準備された。我々は、朝5時半にバスで出発し、ホリンゲルからフフホト、ダルハン・モーミンガン聯合旗（包頭市）を経て、百靈廟（モンゴル語でバトハールガ）へ向かった。その途中、シラムレン・ジョー（普会寺）に少し立ち寄った（拝観料は20元であり、見学はしていない）が、付近のシラムレン草原には多くのツーリスト・ゲルが見えた。このあたりは清代から20世紀まで、オラーンチャブ盟の管轄地域であり、筆者が報告で取り上げた地域でもある。かつてオラーンチャブ盟は、大部分がモンゴルの盟旗の支配する地域であったが、1928年に綏遠省が重複して設立され、中華人民共和国成立後に包頭市が成立している。また、ダルハン・モーミンガン聯合旗は、1952年にハルハ右翼旗（俗称：ダルハン旗）とモーミンガン旗が合併して成立した組織であり、百靈廟鎮はその中心である。我々は、お昼前にチベット仏教の寺院である、百靈廟（廣福寺、俗称：貝勒廟）へ到着し、廟内を見学した。廟は参観無料で、満洲文字、モンゴル文字、チベット文字、漢字など四つの文字で記された偏額が掲げられる。百靈廟は、18世紀初頭にハルハ右翼（ダルハン）旗領内に建立された名利であり、19世紀末には1,200名以上の僧侶がいたという⁴。

1913年頃の写真を見ると、廟を中心とする町の周辺には草原が広がっている。百霊廟は、しばしば政治活動の中心地となり、1933年にスニド右旗の王公である徳王やユンタンワンチョグ（ハルハ右翼旗ジャサグ、雲王）ら内モンゴル西部の王公は、ここで「百霊廟会議」を開いている。また、蒙古聯盟自治政府成立後の1938年、百霊廟にはオランチャブ盟公署が置かれた。

2017年夏の百霊廟鎮は開発が進んでおり、寺院の周囲にはコンクリートの建物が建ち並んでいた。百霊廟は、国民党の軍隊や文化大革命によって幾度となく破壊されており⁵、現在の建物や廟内の仏像や仏画は修復、または新しく設置されたものである。なお、廟内には「百霊廟簡介」の石碑はあるものの、パンフレットなどは準備されていない。百霊廟に限らず、内モンゴルのチベット仏教寺院はモンゴル人にとっては信仰の対象であるが、観光地化の波にさらされている。

百霊廟見学のあと、近くのモンゴル料理店で昼食会が催された。会期中は食事会がまったく開催されなかったため、この昼食会は有意義な会となった。店の名前は「ハサル（哈撒兒）宮」であり、その由来であるチングス・カンの弟のジョチ・ハサルの銅像の前には、菓子や乳製品が供えられていた。当地のモンゴル人はハサルの末裔を名乗っている。そのあと「百霊廟抗日武装暴動旧址」へ行き、丘の上から街を一望する。百霊廟の街を後にして、郊外のスタジアム（百霊廟ナードム産業園）に立ち寄った。スタジアムは真新しく、夏に地方のナードム（モンゴルの伝統的祭典）が開催される場であるが、閑散としていた。夕方、同じルートをとどりバスでフフホトに戻った。

11日は、内モンゴル師範大学の先生方の招きにより、学生に対する講義（講座）をおこなった。オヨンゲレル氏とともに職員バスで大学に向かったが、そこで内モンゴル師範大学教授のオランチメグ氏に再会した。筆者は、オランチメグ氏が内モンゴル自治区図書館に勤務されていたとき、何度かお世話になり、また論文を翻訳していただいたことがある。お礼を伝えることができないまま二十年近くが経過していた。また、講義では、オランチメグ氏や丁晓杰氏をはじめとして、内モンゴル師範大学の先生方のお世話になり、貴重な機会を得た。また聞き手である学生たちも非常に意欲的であった。

師範大学での講義のあと、再び一時間かけてバスでフフホト市内に戻った。バスのなかでは、携帯でモンゴル文字の小説を読む人の姿も見られた。現在、中国のWeichat（微信）にはウイグル式モンゴル文字（いわゆる縦文字）版があり、郷里の人々と連絡するときは便利という。探していた書籍もWeichatですぐに探し出してくれた。二十年前のフフホトでは、人々が街中のキオスクの貸電話を利用していたことが懐かしく感じられる。

4 内蒙古自治区烏蘭察布盟委員会・中国人民政治協商會議文史資料研究委員会編『烏蘭察布文史資料第11輯 烏蘭察布史略』（涼城、1997年）150頁。

5 菅沼晃『モンゴル仏教紀行』（春秋社、2004年）135頁。

午後は、内モンゴル大学と師範大学のすぐ側にある「文化商城」を訪問した。文化商城は、ちょうど著者が初めて内モンゴルを訪問した頃に建設された、文具、書籍、古書市場であり、多くの商店でいつも賑わっている。この夏には再開発で立ち退きの噂もあったが、中止になったという。二十年前に思いをはせれば、その頃は、まだフフホトの旧市街も手つかずのまま残っていたし、蒙疆政権や満洲国時代を経験した方々がまだ存命中であった。そこかしこに歴史の片鱗が転がっていたが、それを歴史として描き出すのは、時間が必要であり、そしてそれは今なお未完である。そのようなことを考えながら、翌12日帰国の途に就いた。今回の旅行では多くの方々に大変お世話になった。ここに記して感謝したい。



百 靈 廟 (2017年9月、著者撮影)